城廣信著

非常時！陸軍を擔ふ人々

10セン

普及社版

本城廣信著

非常時！陸軍を擔ふ人々

普及社

兵事
567
永久保存
圖書課長
事務官
陸軍主要人物の人物批評セリ
極め好意的記述セリ
P25
部隊の字句
次段削除可然ヤ
P36
四、二七

目次

はしがき

二、二六事變に依つて稀有の重任である陸軍大臣の地位には寺內壽一大將が就任した。寺內陸相の任務の主流は部內の系派動向の掃蕩に在る。從つて人事行政は實に重要中の重要事である。そこで寺內陸相は、今回の二、二六事變を契機として、陸軍部內の徹底的肅正と軍秩の確保とを決意し、事變に關連する根本的人事異動を斷行してこの大目的を達成すべく、鋭意考慮中であつたが、いよ〱三月末を以つて一先づ終了した。

後任者の決定及び一般の人事異動については、あくまで、中正不偏の立場に立脚し、人材拔擢と適材適所主義に基づき擧軍邁進を目標として、部內に清新潑剌たる空氣を注入せんとしたところに、從來の如きバランス・オヴ・パワー（＝系派動向の平均化）のみを配慮した右眄左顧的人事を排し、部內の一大刷新に對する陸相の決意がうかがわれ、國軍再建の熱意と誠心とが看取される。

茲に於て二、二六事變の後を承けて非常時局下に於ける陸軍を擔ふ人々の人と爲りを見ることにしやう。

昭和十一年四月

著者

一、侍從武官府

侍從武官長　宇佐美興屋中將

本庄繁大將が、二、二六事變に依つて、軍の長老としての責任を痛感して勇退を決意し、待命仰付となつたので、その後任には第七師團長（旭川）の人格者の譽高き宇佐美興屋中將が親補せらるることになつた。

×　×　×　×

中將の趣味は讀書と乘馬だと云ふ。酒は人並みなつき合ひは出來るが、大して好きといふ程でもない。明治十六年東京生れの本年五十四歳の働き盛りの「江戸ツ兒將軍」だ。陸軍士官學校第十四期の騎兵科出身で、馬政方面では部內隨一の權威者である。

×　×　×　×

日露戰役には、騎兵第七聯隊附として出征し、司令部衞戍隊長として活躍した。大正二年陸軍大學を恩賜の軍刀組で卒業した秀才にして、第十八、第十五兩師團の參謀をつとめ、參謀本部付、

侍從武官長は、官制上、陸海軍の大將又は中將をもつて親補することになつてゐるが、歴代の侍從武官長を見るに陸軍大將がこの重職に當つてゐる。然るに、今回の二、二六事變の責任を負ふて、眞崎甚三郎、荒木貞夫、阿部信行、川島義之、林銑十郎の五大將が豫備役に編入せられたため、その後任を大將に求めることは不可能となつたので、陸軍首腦部では、此を機會として、思ひ切つた人事行政の刷新をはかることを決意し、先任中將が多數あるにも拘らず、新進を拔擢して、第十四期の宇佐美中將を起用するに至つたものである。

×　×　×　×

人格者として部内の輿望を負ふ人である。

×　×　×　×

宇佐美中將の後任としては駐滿〇〇司令官たりし三毛一夫中將が親補された。

オランダ駐在武官、東京警備參謀長を經て、昭和五年三月少將に進級、滿洲事變には騎兵旅團長として出動し、滯滿一年三ケ月、特に興安嶺、ハイラルに永く駐屯して武勳を輝かした。

一昨年八月、滿洲から凱旋して騎兵監となり、一年後には、今日まで奉職してゐたところの第七師團長に親補されて、古巢の旭川に赴任してゐた。

× × × ×

彼の部下思ひは有名である。かつて帶廣市に出張した時、日露戰役當時の部下であつた、老勇士を訪問して、なにかと老後をいたわつた劇的美談は官民をして齊しく感激させたものである。騎兵科出身だけに、馬術はお手のものであり、寡默實行の典型的武人である。蓋し侍從武官長としては最適任であろう。

× × × ×

杉並區高圓寺二ノ三七三の家庭には、母堂きん子刀自(八二歲)、久江夫人(四五歲)、東京帝國大學在學中の長男一屋君(二五歲)、第八高等學校在學中の二男二郎君(二二歲)、旭川高等女學校在學中の長女さち子さん(一五歲)、更に小學校に通つてゐる次女まち子さん(一二歲)三女ふみ子さん(九歲)がある。

長、臺灣軍司令官を歴任して、軍事参議官となつてゐて、超非常時の陸軍大臣となつたものである。明治十二年生れで、本年五十八歳の働き盛りだ。山口縣萩市の出身にして、彼の顔も姿態も圓滿そのものである。ツルリと禿げた頭と童眼とは、何と云つても親しみがある。

× × × × ×

而かも彼は中正の人物だ。そして人事異動を見ても斷乎として進んでゐる點は頼母しい。殊に廣田内閣が自由主義的色彩に依つて組閣せんとした時、此に斷乎として反對したのは、此の時勢の革新的氣流に乘り得た彼の眞面目を發揮するものである。全陸軍は全く革新的動力として動いてゐる。その先頭に立てる寺內陸軍大臣の健闘は皆の期待するところである。

2、陸軍次官　梅津美治郎中將

古莊幹郎中將の航空本部付への左遷に代つて、第二師團長の梅津美治郎中將が陸軍大臣を輔佐して、幕僚の樞軸たるべき陸軍次官となつた。

× × × × ×

中將は明治十五年生れで、本年五十五歳の壯者だ。陸軍大學軍刀組の秀才である。而して所信

二、陸軍省

1、陸軍大臣　寺內壽一大將

五、一五事件を契機として、世の中が大變うるさくなつて來た。「非常時型」があらゆるものに必要となつて來た。

五、一五事件に依つて荒木貞夫が陸軍大臣の重職に就き、次が林銑十郎となり、次に川島義之が親任せられ、現代は寺內壽一大將である。

二、二六事變と云ふ未曾有の大事變は、その社會的根據が全く深刻なものである。その事變が軍人の大衆的な武裝行動であるだけに、陸軍大臣を誰にするかは、誠に重大問題となつた。この世人注目の的たる陸軍大臣の地位には現役大將四人（南、寺內、植田、西）の中、寺內壽一大將が就いたわけである。

×　　×　　×　　×

寺內大將は逝ける寺內正毅元師の子息である。親に似てなか〳〵話せる人物である。第四師團

4、軍事課長　町尻量基大佐

町尻大佐が近衛野砲兵聯隊長より陸軍省軍事課長に起用されたのは何と言つても白眉である。華族の出にして、政界に於ける近衛文麿公と匹敵する人士である。

× × × ×

畏しこくも皇族方とも淺からぬ御間柄にある。即ち町尻大佐は壬生基義伯爵の令弟にして、明治二十一年生れで、本年四十九歳の少壯だ。町尻子爵の養嗣子となり、その夫人は賀陽宮殿下の御令妹である。陸軍大學軍刀組の秀才であり、而かも第二十一期各兵科を通じてのトップと云ふ實に優秀なものである。フランスの輔佐官、參謀本部々員、侍從武官をつとめてきたが、人格高潔にして相當の斷行力ある人物にして、難局打開のために寺內陸軍大臣を輔けて軍政の樞機に參劃するところの非常時の軍事課長としては最も期待される。

× × × ×

田中新一中佐の陸軍省兵務課長代行、富永中佐の參謀本部庶務課長代行は共に、有能の新人拔擢、適材適所主義の現れである。

に邁進する勇斷性は部内有數と見られ、且つ思慮極めて緻密にして、先きに陸軍省軍事課長、參謀本部總務部長を歷任し、北支駐屯軍司令官としては「梅津何應欽協定」を締結して、わが北支對策の基礎工作を完成した有數の支那通である。從つて、飛躍的展開を見んとする、わが大陸政策の遂行の上よりして誠にその人を得たりと云ふべきであろう。

3、軍務局長　磯谷廉介少將

永田鐵山——今井清——磯谷廉介。相澤三郞中佐が永田鐵山を倒してから、とくに此の軍務局長と言ふ地位を世人が注目するやうになつた。蓋し軍務局長の地位は重大である。何となれば、それは軍政上に於ける事實上の中心、樞軸であるからである。

× × × ×

此の重大なる地位についた磯谷少將は明治十六年生れで、本年五十四歲の働き盛りで、陸軍大學卒業、其後、駐支大使館付武官として、多難なる對支政策の第一線に立ち、難問題を巧みに處理し來つた人物である。梅津中將と共に、對支關係の兩權威を軍首腦部に迎へたことは、對支問題に對する陸軍の認識を一層高度化するものとして期待される。

趣味は、沈默と魚釣りだ。魚釣りに至つては正に玄人の域に達してゐる。それだけに寸暇を利用しては釣り竿を肩にして外出したものである。

× × × ×

人は彼を評して「西尾は結局殘る人間だらう」と言つてゐる。此の言葉は、眞に西尾中將を知る者の正鵠を得た批評ではあるまいかと考へる。西尾中將は、潑剌たる、陸離たる姿を、部內或は部外に現はして、未來の大臣たり、又は大將たりと、謳はれる人間ではない。例へば小磯國昭、建川美次と云つたやうな人物の如く、大きな姿を世間に見せてはいない。然しながら、結局馘首になることなくして、後に殘り、或は大將となり、或は三長官の一椅子をも占むべきの地位に達するが如くに思はれるのである。此の考へ方は、たしかに西尾中將をよく批評したものである。此の僅かの言葉こそが、彼西尾中將の姿を全面的に表現し、最も適當したる「寸言的中」とも云ふべきものであると考へられる。今や彼は軍中央部に來て、參謀次長となつてゐるではないか。

何しろ彼は眞面目一徹である。差し當たり「西尾形型」と言へば、軍部に於ける眞面目なものの典型、代名詞と言ふところであらう。恐ろしく責任觀念が强く、事に當つて愼重であり、物に處して周密であり、それに確乎たる信念を持つてやるのであるから、彼のやつたことには粗と云

三、參謀本部

1、參謀次長　西尾壽造中將

參謀次長杉山元中將が參謀本部附となつて、その後任としては、關東軍參謀長の西尾中將が就任した。

中將は菱刈隆、南次郎の兩關東軍司令官を援けて、國防第一線の强化をはかり、滿洲を最も良く認識せる部內の滿洲通なることは言を俟たぬ。

滿露、滿蒙問題を中心として、緊迫せる情勢の展開されてゐる今日、中將が參謀次長となつたことは、對滿國策遂行の上より眞に心强さを感ぜしめる。

中將は新たに侍從武官長となつた宇佐美興屋中將と共に第十四期生である。

×　×　×　×

西尾中將は「沈默將軍」のニック・ネームがある。少尉時代から「物を言ふまい」と言ふ願をたてて、如何にしたら沈默で暮らせるかと言ふことを修養したといふから相當なものだ。

話は信用して良いものである。

彼が參謀本部第四部長時代に、部下の演習班長が、演習想定を作製して來たら、彼は幾回もその作り直しを命ずることを常としたらしいが、こんなことも責任觀念が餘程强くなくては出來ないことである。大抵の人ならば、とにかく、中佐や少佐が相當に研究して作つたものであるから、「うん、よからう」ぐらひのところにしておくことであらうが、彼の眞面目さは之が出來ないのである。又彼がその時代に、演習計畫のために、先づ地理實査に出かけるや、自分で田畑の中にドン〱這入つて行つて、其處此處をかけ廻つて、果して演習が出來るかどうかを實地に見たさうである。之は當然の責任であるとは言へ、しかし、世の中にはこの當然の責任を果たさない人間がある點から見て、彼西尾中將の眞面目さが窺はれる。

いづれにしても、彼は石橋を叩いて渡る主義の人物である。實力に充ち滿ちてゐる。それに身體が大變頑健である。たしかに殘る人物である。

× × × ×

西尾中將は鳥取縣の西尾重威氏の四男にして、兄の幸太郎氏の養子となりし者である。明治十四年十月三十一日の生れで本年五十六歳。陸軍士官學校は、第十四期生にして、明治三十六年六月

ふものがない。此の點で死んだ武藤信義元帥の信頼を得てゐた。武藤が敎育總監で、彼が敎育總監部の第一課長をやつてゐた時の話であるが、彼のやつた仕事に對しては、武藤は信頼の餘り、殆んど盲判を押してゐたと云ふことである。此の邊の話を聞いて見ても、如何に西尾中將が眞面目な、責任觀念の强い、信頼出來る人物であるかが判かる。

西尾中將のその第一課長時代は、全くの時間知らずで、退廳時間が四時であろうと、五時であろうと、その日の仕事が片付くまでは、課長室でコツ〳〵仕事をやつてゐたので、折々部下から「もう電車がなくなりますから、此の邊で打切りませう」とやられたさうだ。長たるものが、こんなに遲くまでガン張つてゐることは、一寸長官道としては考へねばならぬ點ではあるが、とにかく眞面目で、シンから勤勉努力なのであるから、それを非難する者もなかつたらしい。しかし、頭が大變に良くつて、又細密に亘つてゐるので、仕事の上では、自然に部下に對しても相當やかましかつたさうである。

彼が陸軍大學校の敎官時代に、彼の書く戰術要圖や原稿が實に綺麗で、それを淸書したり、謄寫版刷の原稿を書いたりする書記が、常に感服してゐて、今でも「西尾敎官の頭は特別誂へだ」と話し合つてゐると言ふことであるが、之は本當の話であらう。大體に於いて部下たりし人の

どうも新聞記者の受けが悪つたが、凡そ新聞記者なぞとは、そりの合はぬ性質である。然し西尾中將の信念と自信とは、そんなことなぞどうだつていいと言ふ風である。全くそれでいいのである。彼は創業の偉人ではない。守成の偉大なる凡人と云ふ型である。彼は自らを知る明がある。此の態度で進む限り、彼はやつぱり殘る人物である。今や西尾中將は參謀次長となつた。三長官の一人となるの時期は目捷に迫つてゐる。

2、第二部長　渡久雄少將

參謀本部第二部長として令名のあつた岡村寧次中將が第二師團長に榮轉したので、その後任は部內屈指の支那通たる渡久雄少將が就任した。明治十八年生れで、本年五十二歲の働き盛りだ。西尾中將の滿洲通に配するに、渡少將の支那通を以つてせるは、日本の對支政策の高度の發展を來たすものである。大いに期待してよからう。

3、作戰課長　石原莞爾大佐

「石原莞爾」と言ふ名は、石原大佐がまだ中佐で關東軍參謀として活躍してゐるときから、同

の歩兵少尉任官である。日露戰役のときは中尉に進み、歩兵第四十聯隊小隊長として終始してゐる。戰後、陸軍大學校に入學し、四十三年に次席で卒業してゐる。首席は畑俊六であつた。それから、後に陸軍省副官、歩兵第十聯隊附をしばらくやり、それから東京に戻つて來て陸軍大學校兵學教官となり、大佐に進んでからは、曾て在勤した歩兵第四十聯隊の聯隊長に榮轉し、次いで、教育總監部第一課長に拔擢されたものである。課長の職は足掛け三年に亘つてやり、稀に見る名課長と呼ばれたものにして、實に典範令や軍隊教育に關する造詣は頗る深きに亘つてゐると云はれてゐる。それから、少將になつて、歩兵第三十九旅團長に出たが、やがて、參謀本部第四部長として、初めて參謀本部の椅子に腰を下した。それから昭和九年三月、小磯國昭中將が第五師團長に轉じた後を承けて、關東軍參謀長となつて滿洲で活躍してゐたものである。今や彼は單なる滿洲の參謀長ではない。世界を相手の全日本の全陸軍の參謀次長である。

× × ×

彼は進むと云はれずして、結局殘ると言はれてゐる。その言葉の示す如くに、裕達潤活ではなくして、重厚そのものである。明朗と云ふわけではなくして、どちらかと云へば陰氣である。又、饒舌ではなくして寡默である。彼が軍事調査委員長として、多くの新聞人と折衝したときには、

は一躍進した。ト丶……と中隊の前に進んだかと思ふと、大喝一聲「馬鹿！」と來た。
中隊の幹部は、此の聯隊長の怒りが何の爲だか分らず、キョトンとしてゐた。忽ち石原さんの口から第二の言葉が、嵐のやうに飛び出して來た「紋附は借物だぞ!!」。
中隊の幹部は、初めて分つた。直に舍外の召集兵を大急ぎで舍内に入れた。卽ち石原さんの氣持は、つまり「召集兵の着て來た紋附には、他所からの借物もあらうから、雨に濡らさせるな」といふのである。
此の一言で召集兵は、すつかり石原さんに心服して了つたといふが、此の言葉は決して普通平凡な聯隊長の口から出る言葉ではない。東北の農山村の生活をあきるほど見聞してゐる筆者も、實は此の逸話で、彼石原さんに對する認識を非常に改めたのである。
併し此の逸話は、必ずしも石原さん稱揚の材料とはならないであらう。苟しくも聯隊長ともあるべきものが、中隊の幹部を、馬上から馬鹿呼はりするのは、輕率極ることだ、彼の心やりは十分に分る、併しそれにはその方法もあらうといふものである。直情徑行は個人としては面白いが、組織體に於ける責任者としては、大に愼しまねばならぬことゝ思ふ。が、そうした公論を暫ばらく措けば、此の逸話のうちに、石原さんの面目躍如たるものがある。

じ關東軍參謀であつた「板垣征四郎大佐」の名と共に、古くから筆者の强き記憶にある。
中堅青年將校諸君は「板垣さんは眞に大人物で將來益々大を成す人である。石原さんは大物には違ひないが、直情經行で一寸カドがある」と批評してゐたが、最近の石原さんは大分カドが取れて來てゐるやうである。他人事ながら偉大なる石原さんのためにも、國家のためにも、嬉しいことである。
現在、石原さんは參謀本部作戰課長、陸軍步兵大佐である。外形的には眇なる陸軍部内の一存在にしか過ぎないが、然し石原さんの力量は相當なものだ、と言ふことは一般に認められてゐる。

× × × ×

石原さんが仙臺の步兵第四聯隊の聯隊長である時、或る夏の某の日、豫備兵が演習召集で入營した。折り惡しく朝來の霧雨で、宮城野原頭の營庭は、うす暗く曇つてゐた。各中隊では召集兵を中隊前に一列側面縱隊式に整列させて、一人づゝ所要の取調べをして、營舍内に入れてゐた。ありそうな圖である。そこへ石原聯隊長は、馬蹄戞々として出勤して來た。衛兵は整列して、喇叭の音を以つて聯隊長を迎へ、聯隊長は何時もの如く營庭に這入つた。と見ると、豫備召集兵が霧雨の中に列んでゐる。はつと石原さんの顏が緊張すると共に、その騎座はきりツとしまり、馬

出しなかつたそうだが、その時でもコツ〳〵やつてゐたのかも知れぬ。

陸軍大學は二番で卒業し、軍刀組の秀才である。その後大尉で教育總監部附となり、大正九年には漢口に在勤して、彼の支那硏究の端緒を得、十年には陸軍大學教官となつた。此の教官時代には隨分逸話が多いが、その戰術指導が如何にも出鱈目に見えた。現地戰術などでは、想定も何も考へずに現地に臨み、學生を前にしてから想定を作るといふ鹽梅で、怠慢の甚しいものゝやうであつたが、その指導適切、講評的確、學生はいづれも敬服したといふが、之れは彼がいゝタネをもつてゐたといふことになる。或る急所、要點をガツチリ握り、それをタネにして演繹するから、人が敬服するので、まあ、頭のいゝ、要領のいゝわけである。

大正十一年に獨逸に留學し、留ること三年にして歸朝し、それから又陸軍大學教官をやり、昭和三年八月中佐に進むや、その十月關東軍參謀となつて、旅順に赴任した。時の軍司令官は有名な中將村岡長太郎であつた。彼の赴任する頃から、滿洲は何となくザワつき出した。某重大事件で村岡中將は責を負つて辭職し、次いで來た中將畑英太郎は、大酒飲みの故に急逝し、それから大將菱刈隆が來たが、昭和六年には中將本庄繁と交代した。その九月に滿洲事變が勃發したと言ふわけである。

石原さんの言語は卒直にして衣を纏はず、その態度は一見豪放にして時に禮を失することもある。這般も宮城縣の學務部長を、滿座の中でバカ呼ばりして、心ある者をして眉をひそめしめたといふことであるが、こんなことを彼は平氣でやるのである。仙臺市中を支那服で歩いたり――尤も之は仙臺に限らず――外國で異様の風體で歩いたりしたそうだが、直情徑行といはうか、些事に拘泥せぬといはうか、それとも衒事的人物といはうか。彼ほど常識の發達した苦勞人が、氣付かずに超世間的行動を取つてゐるとは考へられない。

× × × ×

彼は明治二十二年一月十八日、山形縣鶴岡町に生れた本年四十八歳の少壯だ。彼の祖父は明治維新の戊辰の役では、藩の新徵組の三羽烏と稱へられた豪傑だそうだ。父は警部で罷めてから、鶴岡町の公吏になり、今は隱居してゐる。石原さんは長男だが、次男には海軍中佐の石原次郎さんがゐる。

彼の家は經濟的に餘りに惠まれず、彼も幼時より相當貧乏の味をなめてゐる。仙臺陸軍地方幼年學校第六期生で、陸軍士官學校は第二十二期生である。學校時代は例の豪放的態度で、人前では餘り勉強もしないやうに見えて、常に優秀の成績をあげてゐた。尤も彼は日曜日には、餘り外

は一度も行かず、參謀本部も今度が殆んど始めてゞある。故に軍部に於ける特等席組の經路とは言ひ難い。それにも拘らず、彼の評判は大變にいゝ。その器の大なることは早くから認められてゐたといふが、彼を知る誰に聞いても、異口同音に石原さんを偉いといふ。兎に角やがては陸軍を代表する人物になるべしとは、衆目の見て以つて一致するところである。

或る者は「石原は天才だよ、軍人にならずに何になつても、確かに傑出する男だ」と言つた。或る者は「若い男を賞めてはいけない、圖に乘るからな、併し石原だけは、いくら賞めてもいゝ。賞めるだけの價値もあるし、又賞められていい氣になるやうな馬鹿ではない」といつた。確かにさうだらう。

× × × ×

彼は日蓮の研究家だといふが、その人生觀はこゝから來てゐるらしい。何となく脫俗的な態度も、此點で首肯される。又彼が心血を注いで研究したものはナポレオン戰史である。その研究の副產物として蒐集したナポレオンの肉筆、戰爭關係の泰西名畫、書籍、又フリードリッヒ大王の筆跡等は、實に時價數萬圓になるといふ。彼の戰術のタネはこゝにあるのかも知れぬ。

斯うした修養と研究とは、彼に自信を附ける。一例を擧げれば、一昨年彼の聯隊は、荒木貞夫

満洲事變こそ、彼の心血をそゝぎ、智嚢を傾倒した重大活動の場面であつて、作戰參謀としての功勞は、事變行賞に於いて功三級金鵄勳章を以つて酬ひられたのを見ても分る。實際、事變の作戰及び滿洲建國に於ける彼の功績は、沒すべからざるものがある。

尙ほ事變中に於ける彼の武人としての豪膽さは、實に見上げたものであつたらしい。通遼附近の大倉組農場を、飛行機で救援した時、彼が危險に曝されつゝ、一人飛行機の再來まで偵察してゐたといふ話や、馬占山討伐に際し、紅橋の傍に敵彈雨飛に在つて、平然と參謀勤務に服したといふ話は、實見者の驚嘆して語つてゐる所である。「石原參謀は不死身だ」と言つてゐるが、こんなことは非常に將兵の尊敬と信頼とを集めるものである。兎に角豪膽な男である。

昭和七年八月大佐に進むと共に、關東軍を去つて內地に歸り、やがて國際聯盟の軍縮本會議に派遣され、それは又必然に滿洲事變に關連して、日本の脫退となる聯盟會議に關係した。八年歸朝して、八月には步兵第四聯隊長として仙臺に赴任し、それから昨年八月、參謀本部課長として中央部に來たわけである。

× × × ×

彼の今日までの足跡は、兵學敎官と參謀と聯隊長、それに海外派遣だけであつて、軍政方面に

ものあるも、その成績拔群なるものあり」といふ意味のことがあつたらしい。此の事は一面荒木の大きいところを語るものかも知れぬ。普通の檢閲使ならば、御機嫌頗る斜めになつて、クソミソにやつゝけたことでもあらうと思ふ。併し又荒木が、石原さんを平素愛するといふ間柄であつたのに原因するかも知れぬ。

× × × ×

昭和十一年度の豫算閣議が昭和十年十一月にもめて、時の高橋藏相は「軍部が徒に豫算の膨脹を計れば遂に國民の怨嗟の府となる」などと言つて、軍部を誣つた時は、問題が作戰資材整備費に關するものだけに、彼の奮鬪も相當であつた。又ジユネーヴのメトロポールに於いて、各國の新聞記者を前にして「世界を敵として一戰を交ゆるも、日本は敢へて辭せじ」と豪語してセンセーションを捲き起したこと、又松岡洋右さんが「聯盟脫退の眞意義を知つて、力になつてくれたのは石原さんである」というたことを聞いてゐるが、これも石原さんの眞面目を示すものである。

× × × ×

彼が仙臺に在るや、暇を見出しては地方青年の指導に從ひ、又地方有志の國防知識の研究を資けた。その國防論など見ると、普通の將校さんに見ることの出來ぬ卓越したものであつて、筆者

の特命檢閲を受けた。特命檢閲は聯隊長の運命試驗とも見られ、聯隊長はビク／＼もので準備するを例とする。然るに石原さんは平氣の平左で檢閲を待ち「平常のまゝ見て戴くつもりだ」と言つてゐた。愈々檢閲になり、荒木は石原さんに「聯隊全滅の場合、聯隊長の處置如何」と問うたそうだ。すると石原さんは、身をひるがへして大地に横臥し、「聯隊長戰死！」と叫んで、並みゐる隨員一同を啞然たらしめ、流石の荒木をして「うーん」と唸うなづかしめるのみであつたといふ。此の眞似の出來る聯隊長は、天下に二人とあるまい。更に荒木から、「將校成績表は？」と問はれて、差し出したものは、驚く勿れ、たゞの白紙である。「之れは白紙ならずや？」「洵に然り、小官が聯隊長として赴任して以來、僅かに一ケ年、親にしてさへ我が子の性能を知るに苦しむ。况んや他人にして此の短時日に將校全部の性能を知る能はざるや、當然である。若し書けば前任者の書けるものを踏襲する他なし。是れ小官のよくなさゞるところである。成績表にして間違へんか、人の運命に重大影響を及ぼすを以つて、輕々に筆を下し難い。但し當隊の氣風は、少し鈍重なれども、精神確乎、軍紀嚴肅、大に實戰に用ふべし」とやつてのけ、又も荒木以下を啞然たらしめたといふことである。

されば講評には「當聯隊の訓練法は、すべて尋常一様ではなく、常軌を以つて律すべからざる

四、教育總監部

1、教育總監　西義一大將

西大將は穩健、中正、凡傭である。無色にして系派的色彩は少しもない。今回の二、二六事變に就いては軍の長老の一人として當然引責辭職すべきであつたらうが、無色にして中傭であることを理由として現役に殘されたものである。明治十二年生れで、本年五十九歳だ。

2、本部長　中村孝太郎中將

中村中將に就いても、西大將について言つた事をそのまま適用すれば足る。

今回の二、二六事變の後を承けて、陸軍大臣たるべく、一時噂されたが、然し、彼は軍全體の革新的氣運に乘り切れなかつたと見える。或はやつぱり、大將の中から非常時型を出す必要があると言ふことになつたのかも知れぬ。明治十四年石川縣に生れた本年五十六歳の男だ。

とにかく、陸相の噂のみで立消となつたのは彼としては殘念であらう。要するに、今後は、革新型、非常時型でなくては、役に立たない。

など共鳴する多くのものを有する。

彼が斯様に陸軍の一人材と見られるところから、彼を利用せんとする政治家、社會運動家などがあるそうであるが、それは彼のために戒心すべきことを忠告したい。尤も彼は聰明にして時代を見ることと相當敏感であり、おだてられていゝ氣になるほどの年でもあるまい。自重して大成すべきを希つて已まぬ。殊に幾度か健康を害してゐるそうだ。命あつての物種、大切にすれば一生もてる命だ。粗末にする勿れである。

石原さん、妄評お許し下さい。

× × × ×

中將は、酒は若いときに飲んでしまつたと言つて、今は飲まない。趣味としては謠曲をやる。
中將は、近衞の傳統的名譽を守り、日本の幾十萬軍隊の核心師團としての實を擧げたいとの決意を示してゐる。

× × × ×

中將は、佐賀縣の出身、明治十年の生れで、本年六十歳。陸軍士官學校は明治三十五年に卒業した。日露戰役がその初陣で功五級をもらひ、陸軍大學を卒へ、陸軍大學に教鞭をとること前後九年、歐洲大戰當時はフランスにあつて五年間兵術を學んだだけあつて「香月の歩兵戰術」と云へば陸軍の誇りだ。聯隊長は勿論つとめるし、第十旅團長、歩兵學校長などを經て、第十二師團長となつたのが昨年の三月で、今年の三月には參謀本部付となつて、現在に至つてゐたものである。

2、第一師團長　河村恭輔中將

蹶起部隊を出して、引責待命となつた、第一師團長堀丈夫の後任には、第十六師團（京都）留

五、部隊長 其他

1、近衞師團長　香月淸司中將

近衞師團の師團長橋本虎之助は引責待命となつた。而して、香月中將が禁闕警衞の重任たる近衞師團長に親補された。

中將は二月二十四日の內命では、久留米第十二師團長から、參謀本部付となり、やがて昇格さるべき支那駐屯軍の司令官として赴任すべく待機してゐたもので、實に一ケ月のうちの三段飛びの出世だ。

×　×　×　×

杉並區阿佐ケ谷六ノ一九三の家庭には、ツル子夫人(五一歲)、次男の成蹊學園在學の秀雄君(二〇歲)、三男の久留米明善中學二年の良夫君(一六歲)がゐる。

長男の淸明君は騎兵少尉として、ハイラルに出征してゐる。長女淸子さん(二八歲)は原田三等軍醫正の夫人となり、次女きみ子さん(二六歲)は三井鑛山技師に嫁してゐる。

次女靜子さんがあり、何れも澁谷區上山町一九の本邸に祖母君と共に住んでゐる。

3、第二師團長　岡村寧次中將

梅津中將の後任として第二師團長に親補された岡村中將の躍進振りは、正に刮目すべき異數の拔擢である。然し勿論是は彼が秀れてゐるためである。卽ち岡村中將は參謀本部第二部長として最も令名あり、部內屈指の支那通として知られた人である。寺內陸相が一躍師團長たらしめたのはよき英斷であるとして評判が良い。

×　　×　　×　　×

岡村中將の將來は最も期待されて居るものの一である。殊に彼が關東軍にゐる頃の參謀振りは目ざましかつた。明治十七年生れで、本年五十三歲の働き盛り。健鬪を祈る。

4、第四師團長　建川美次中將

建川さんは幾度か、中央部への榮轉を傳へられたが、それが實現しない。軍令系統の彼のことだから、參謀次長になるであらうとは、いつの異動のときでも噂されてゐるが、それが具體化し

守司令官河村恭輔中將が親補された。

× × × ×

中將は、一死報國の誠心に燃えてゐる。中將は寺內陸相と同鄕で、山口縣萩市川島町の出身であ。明治十六年生れで、今年五十四歲の働き盛りだ。陸軍士官學校第十五期生、明治三十七年砲兵少尉に任官、三十八年には砲兵第三聯隊付として、旅順攻圍軍に參加、大正二年大尉に進み、大正八年陸軍大學卒業、大正十二年には第十二師團司令部付として、シベリアに派遣せられ、十五年大佐に昇進、昭和二年ジュネーブ軍備縮少會議全權隨員として派遣され、歸國後野砲兵第二十二聯隊長として滿洲へ駐剳、昭和三年少將に進級、津輕要塞司令官、砲兵監付、重砲兵學校長を歷任、十年八月中將に進み、第十六師團留守司令官となつてゐたものである。

× × × ×

非常な部下思いである。演習でくたぶれて危く乘り過さうとした兵を自ら搖り起して下車させてやつたさうだ。さうした人間味があるらしい。

× × × ×

いね子夫人との間には、慶應大學在學中の長男正恭君、双葉高等女學校出身の長女榮子さん、

明治三十八年二月十日

第二軍司令官　奥　保　鞏

此功に依つて戰後の論功行賞で、功四級金鵄勳章を賜つたが、蓋し中尉としては異例に屬する。

× × × ×

戰後の明治三十九年に陸軍大學校に入り、四十二年に恩賜の軍刀を戴いて卒業した。爾來騎兵科の俊才として、印度駐在武官、參謀本部々員、中佐として出でゝ騎兵第五聯隊長、戻つて參謀本部課長、それから支那公使館附武官、少將になつて歸つて參謀本部第二部長、第一部長と歷任した。此の在任中に滿洲事變が起つたのであるが、彼の任務は事變に直接關係あるものであつて、彼の名はその頃から急に社會的に光り出した。事變中に中將に進み、ジュネーヴの軍縮本會議には、陸軍を代表する高級隨員として赴任したが、會議が龍頭蛇尾、何だか分けの分らぬうちに終幕したので、歸つて第〇〇團留守司令官となつた。それから九年六月第十師團長の職に就き、更に第四師團長となつて今日に至つてゐる。

× × × ×

建川さんは新潟縣出身者にして、野崎美孝の三男として、明治十三年十月三日に生れ、建川周

ない。

× × × ×

丈けは餘り高からず、でつぷり太つた堂々たる體軀である。唯一寸目尻が下つてゐる。此の建川さんが、日露戰爭のときの挺身斥候をやつて一躍有名になつた。確かに群を抜いた武功であつた。金澤の騎兵第九聯隊の小隊長として出征した彼は、特別任務を帯びて、六名の挺身斥候の長として敵地深く進んだのであつた。そこで、左の如き感謝狀を貰つた。

騎兵第九聯隊

陸軍騎兵中尉　建　川　美　次

右奉天鐵嶺撫順附近の敵情及地形偵察の任務を受け、明治三十八年一月九日宿營地韓三臺を發し、大灣附近に於て遼河を渡り、新民屯西方約六里の牛拉門を過ぎ、鐵嶺西方高地を經て撫順東方約六里の營盤に達し、遂に城廠賽馬集及連山關を經て、二月三日黄泥窪に至り聯隊に復歸せり。其間或は敵騎に遭遇し、或は敵の守備兵の爲に發見せらるゝも、奇計を以て奇禍を免れ、時に或は糧秣を絕つこと三日に至るも、堅忍不撓敵中に在ること二旬、遂に克く任務を達成せり。仍て其武功を賞し、感狀を授與す。

尺出れば、そこに塹壕を掘り、一寸取れば、そこに胸墻を進め、一歩一歩大地に根を張つて進む要塞攻撃の歩兵戰法らしいところが少いと思はれるのである。

滿洲事變前、參謀本部の部長の職にあつて、諸地方の演說をして一寸問題になり、又その內容に就いても、心ある者をしてハラ〳〵させたものであつた。滿洲事變勃發當時には、何たる偶然ぞ、彼は〇〇に泊つてゐたといふことである。

彼は滿洲事變で急に、その名が社會的に知られ出し、建川將軍の名でビク〳〵した者も少くなかつたさうだ。彼の行動に一寸軌道外れのところがあつて、何をやり出すか分らないといふのが、畏怖のタネだつたのかも知れぬ。卽ち革新的人物と見られてゐたのであるらしい。併し彼とても、もう五十七歲といふ圓熟した年配だ。何時までも軌道外れでは困る。或る海軍士官が、「建川のやうな男が、どうして今まで罷めさせられずにゐたらう。流石に陸軍は大きいものだ」と妙なところを感服してゐたが、果して海軍士官が見た如き軌道外れであり、且つ今日まで退けられずにゐたとすれば、其は彼の兵科閥、閨閥、同鄕閥に因るものであらう。

そうした彼が、第〇〇團留守司令官として地方に出たきり、參謀次長の呼聲を幾度か耳にしながら、どうしても中央部に戾られぬといふ運命を、彼靜かに考へて見る必要はなかろうか。建川

平さんの養子となつてゐる。本年五十七歳だ。彼の今日ある所以は、勿論彼がそれだけ勝れた所があるからではあるが、又一面極めていゝ先輩と、姻戚とを有したことにも依るだらう、少將森岡正之は騎兵科の大先輩にして、官は少將まで進めるに過ぎなかつたが、明治末年には騎兵部内で侮るべからざる勢力があつたものである。此の森岡正之の長女が騎兵大將鈴木莊六の妻であり、次女は騎兵大將森岡守成に嫁し、而して四女を娶れるものは卽ち此の建川さんにして、又鈴木は建川さんの同鄕の先輩である。兵科閥ゝ閨閥と同鄕閥とが、縱横に張り廻されてゐる中に、彼建川さんは將軍街道を悠々と進んでゐたのである。彼は十三期生では第四位にゐるが、大將候補者としては第一位にある。

× × × ×

彼は所謂武人である。軍政方面には殆んど足を入れたことなく、常に眞正武人の領域に止つてゐるが、併し彼の野心は、中々こゝに止つて滿足しさうもない。「敵中橫斷三百里」式の膽力もあり、燃ゆるが如き鬪志もあり、又向ふ見ずの猛進力もある。又何をやらせても、結構やつてのける實行力を持ち合せてゐる。けれども何だか、あぶなかしい氣がする。天馬空を行くか、駿馬大地を蹴るか、何しろ騎兵らしい勇しい姿を見せるが、結局は騎兵ではないかといふ氣がする。一

そこで岩越中將は四月二日午後左の如き告諭を發した。

× × × ×

告諭第四號

遽に大命を拜し不肖恒一前司令官の後を承け戒嚴司令官の重任を負ふ、戒嚴地境内の情況は概ね平靜を保持し特異の事象を認めざるも尙戒嚴令中必要なる規定の依然適用せられつつある所以のものは未曾有の今次の不祥事件に關する善後處置を完全にし、拔本塞源的肅正を行ひ今後是の如き不祥事の絕無を期し、軍民一體、皇道を扶翼し、宸襟を安んじ奉らんとするの目的に外ならず

官民克くその理を辨へ本職を信倚し益々言動を愼み操守を固くし、協力一致戒嚴の施行をして愈々遺憾なからしめんことを期すべし

昭和十一年四月二日

戒嚴司令官　岩　越　恒　一

さん！忠言して相濟みません。

5、憲兵司令官　中島今朝吾中將

習志野學校長から榮轉したところの、中島中將は、資性豪直、中正公平の實行家であるから、憲兵司令官としては適任であると考へる。明治十五年大分縣に生れた。本年五十五歳である。

× × × ×

憲兵將校や憲兵下士官に向つて「中島さんの評判はどうですか」と聞いて見ても、みんな、非常時的な遠慮をしてゐるせいか、「まだ新任匆々の人だから一寸判りません」と言つて、批評を避けてゐるさうである。

6、戒嚴司令官　岩越恒一中將

東京警備司令官兼東部防衛司令官兼戒嚴司令官として、不眠不休の活動に全力を盡してゐた香椎浩平中將は、今回の事變に關する責任を取つて待命仰付と云ふことになり、その後任としては先きに參謀本部附となつてゐた岩越恒一中將が親補せらるることになつて、四月二日親補式を了つた。

× × × ×

夫人は語る「香椎さまのお後ですから、どんなにか責任を重く感じておりますやら……身體も大變丈夫で御座いますから、その點は心配ありませんが、無事お役を仕遂げてくれますやうに祈念致しておる次第で御座います。……若い時分はずいぶんお酒をいたゞきました。只今も宴會などでは相當にいたゞくやうでありますが、家ではちつともいたゞきません。……趣味と申しましても申し上げるほどのこともなく、乘馬などは好きのやうで御座います。」

× × × ×

性格は氣一本の人で、極めて緻密な頭腦を有し、近代工兵戰術の大家にして、多年敎育總監部系統を歷任しただけに、有數の敎育家である。

岩越中將は明治十一年大阪府の直右衞門氏の長男として生れたものにして、本年五十九歳である。明治三十三年陸軍士官學校卒業の第十二期生である。三十四年六月工兵少尉に任官して、工兵第三大隊附となつた。日露戰役に出征し、普蘭店、首山堡などの戰に殊勳を立てて、軍司令官より、感狀を授與せられ、更に戰後の行賞に當りては功四級金鵄勳章を授與された。四十年十月陸軍士官學校教官となり、大正元年十一月陸軍大學を卒業して、翌二年十月陸軍省軍務局課員、陸軍大學兵學教官、參謀本部部員、海軍大學教官などを歷任し、十一年八月參謀本部課長となり、十四年十月更に陸軍大學兵學教官となり、十五年三月電信第二聯隊長、昭和二年七月佐世保要塞司令官、三年八月以來、通信學校長、工兵學校長、砲工學校長などを歷任して、八年八月工兵監となり、滿洲事變には岩越本部隊長として現在まで討匪行に辛苦をなめてゐた。十年三月第三師團長に榮進し、去る三月二十三日を以つて參謀本部附に轉じて今日に至つたものである。

× × × ×

× × × ×

自宅は杉並區高圓寺七ノ一一〇〇にして、家庭には貞子夫人(五一歳)と養嗣子の赤羽工兵隊附工兵中尉紳六君(二八歳)がある。

して」と云つて、勇敢にも、將軍と共にやはり滿洲國へ行くのである。

×　　×　　×　　×

三月二十二日、滿洲國へ赴任の途についた大將は、車中で新聞記者團から、對滿政策を中心に、滿ソ國境紛爭問題など、矢つぎ早に質問の包圍攻擊を受けながらも、例の悠然たる調子で、鋭鋒をのらりくらりと受け流した後、おもむろに「さあ、諸君、もう聞くことはないかな。矢つぎ早な諸君の質問に、丁度先生の質問を受けた生徒といつた所で、一寸面喰らつたが、どうぢや、及第だつたかな。それとも、わしは落第か……、子供の入學試驗には親たちが一生懸命で心配するんだが、わしの試驗では、これが大變氣をもんでゐるやうだぞ」と云つて、傍らで心配さうに聞き耳を立ててゐる園田參謀を顧みて、朗かに微笑したので、一同は「大將、及第ですよ」と言つて大笑ひした。

×　　×　　×　　×

現役四大將（南、寺內、植田、西）中の一人だ。令名ある板垣參謀長との共働、名コンビで、國防第一線の强化は確保されるであろう。

六、軍司令官　其他

1、關東軍司令官　植田謙吉大將

本庄繁大將――武藤信義元帥――菱刈隆大將――南次郎大將――植田謙吉大將。卽ち例の新京事件に依り、南次郎は參謀本部付となされ、その後任には、植田大將の親任となつた。

×　×　×　×

植田大將は明治八年大阪に生れた、本年六十二歳である。軍の最長老だ。

×　×　×　×

植田大將は人も知る「隻脚將軍」で、而かも「童貞將軍」である。やもめ暮しだ。骨を滿蒙の地に埋める決心で赴任すると言ふのに、その引き越し荷物は、やもめ暮しの氣やすさで、ナンと僅かに二十個、トラック一臺が、澁谷區幡ケ谷本町の自邸から出ただけで、もう邸内はうそ寒く、ガラン洞となつてしまつた。

お引越し荷物と一所に、常住坐臥、將軍の世話をしてゐる二人の女中さんたちは「是非お伴を

の傑物である。板垣さんの將來こそ、萬人の刮目して見るところである。蓋し大物中の大物である。彼板垣さんの健在は國家のために最も大切なるものの一である。自重、自愛、以つて御健鬪なされんことを祈る。

3、關東軍憲兵司令官　東條英機少將

今度の二、二六事變の責を負つて憲兵司令官の地位を去つたところの岩佐祿郎は、前に關東軍憲兵司令官をしてゐたが、東條さんはその岩佐の後任として就任したのである。

×　×　×　×

彼は是亦部內有數の人傑である。彼は以前に憲兵から虐められてゐたと見えて、憲兵を大變嫌つてゐたさうであるが、かうして、憲兵となつて見ると、大分興味を持ち出したと見えて、大いに働いて、斷然關東軍を抑さへてゐるとの事である。殊に例の新京事件については、相當斷乎たる態度をとつてゐると聞いてゐるが、筆者は東條少將の自重を望むものの一人である。

×　×　×　×

東條さんは、明治十七年生れで、本年五十三歲の働き盛りである。此の次には、憲兵司令官と

2、關東軍參謀長　板垣征四郎少將

西尾壽造中將の參謀次長就任により、關東軍參謀副長の板垣少將が、昇進したるは蓋し最も妥當且適任である。滿洲事變前後から今日まで、文字通り板垣さんは不眠不休の大車輪的な活動をした。おかげで滿洲國の誕生は實現し、日本の基礎は益々鞏固となつた。板垣さんの功績は正に永久不滅である

× × × ×

板垣さんは「滿洲の父」と仰がれてゐる。滿洲の人々は「板垣大先生々々」と云つて尊敬してゐる。殊に皇帝の御信任は深い。

× × × ×

雅量の大きい大人物にして、全軍中に於いて、第一番に將來を囑目されてゐる。腹が太く、頭腦が緻密である。殊に軍部全體の強い信頼を受けてゐる。

× × × ×

板垣さんは岩手縣出身にして、明治十八年生れで、本年五十二歳の壯者である。陸軍大學卒業

る。若くして顯はれず、肩章をベタ金で飾つてから段々と顯はれ來つたものである。

× × × ×

小磯さんは明治十三年四月一日山形縣新庄町の生れである。本年五十七歳の働き盛りだ。日露戰爭には中尉で歩兵第三十聯隊附として出征し、戰時中に大尉に進んで同聯隊中隊長として凱旋した。

彼の少、中尉時代、實兵指揮では聯隊で鳴らしたものであつて、當時流行した一齊射撃の指揮では、「小磯の一齊射撃」と言つて大變な評判であつた。彼は今で、美聲なることで有名だが、若い時から然りで、彼が美聲を張り上げて「目標何々、ネー、テ！」「ド、、、ン！」とやると、檢閲官は常に「ウン、よろしい」と言はざるを得なかつたといふことである。

歩兵第三十聯隊といふのは、新潟縣村松にあつて、日露戰爭では第一軍に屬し、最も永く戰地に在つた部隊にして、山地方面で健闘し、軍司令官黑木爲楨から、二回も感狀を貰つてゐる。彼も功績あり、功四級といふ破格の行賞にあづかつた。

戰後、彼は聯隊副官をやつたが、田舍の孤立聯隊の而かも戰後の多忙の裡にあつてよく勉强し、四十年に陸軍大學校の門をくゞり、四十三年に出た。出ても好成績ではなかつたので、大尉、少

なつて、中央に戻つて來るかも知れない。

4、朝鮮軍司令官　小磯國昭中將

陸軍中將小磯國昭さんは、年と共に光彩を放つて行くやうに感ぜられる。陸軍士官學校の成績も、陸軍大學校の成績も、さしていゝといふほどでもないのであるが、今や小磯さんの存在は、全陸軍の中に於いて推しも推されもせぬものになつてゐる。陸軍士官學校第十二期生も決勝點に近づくにつれて、朝に一人、夕に一人と落伍し、もう殘り少なになつてゐる。杉山元、小磯國昭、柳川平助、岩越恒一の四氏。競爭者はこれだけである。となると小磯さんは前走者を二三人拔いて、決勝點に飛び込みそうである。彼の體力は益々頑强に、その意氣は愈々旺盛である。

×　×　×　×

大器晩成といふ言葉がある。大器は晩成するものだといふ意味か、大器となるには、結局晩くまでかゝるといふ意味か、それとも、又大器の中には晩成組もあるといふ意味か、その何づれであるかは知らないが、若しも小磯さんを大器とするならば、彼は兎に角晩成組に屬する人間であ

本部課長たりし小磯さんが、或る重大任務を帶びて滿洲へ行つたこと、昭和六年五月の萬寶山事件以來の軍務局長、陸軍次官としての小磯さんの活動ぶり、關東軍參謀長としての小磯さんの畫策、等々、要するに小磯さんは口も八丁、手も八丁で大活躍をしたのである。

× × × ×

小磯さんは今や部內傑出の大物と見られるに至つた。海軍大將加藤寛治は、「陸軍で軍人らしい奴は、小磯一人だ」といつたそうだが、とにかく大器である。又或る人は「小磯はその器に於いて、大臣よし、總長よし、總監よし、部內稀有の俊豪だ」と言つてゐるが、それも正鵠の一を得たものである。

どう見ても彼は線の太い軍人政治家である。膽もあり、又策もある。やるとなつたら徹底的にやるであらう。然し、此の軍人政治家といふのが、どうも終りを全うしない。此點彼自ら知るところあるや否や。自重を望む次第である。

× × × ×

彼は斗酒尙ほ辭せずといつた酒豪であつて、醉へば美聲を張り上げて歌ふ。豪傑にも似合はず、案外センチなところもあつて、歌を作つたりするが、滿洲事變勃發當時流行した滿蒙小唄は、彼

佐の頃は大體田舍廻りで暮してゐたが、シベリヤ出兵では特務機關として活躍し、此頃から漸く芽が出て、大正九年には參謀本部々員、それから航空本部々員を二年やり、大佐になつて歩兵第五十一聯隊長となり、此の聯隊長で彼はすつかり男をあげた。將校團の戰術教育を大いにやつて認められたことなども、その一つであつて、此頃から彼の航路は希望峯に向つたのであつた。

大正十四年に參謀本部課長となり、次いで又も航空本部に歸つて總務部長をやり、それから陸軍省に來て整備局長となり、やがて軍務局長に進み、五、一五事件に因る非常時內閣で荒木陸相の下に拔擢されて陸軍次官になつたが、關東軍司令部が急に重要性を增し、大將武藤信義が軍司令官として赴任するに當り、拔擢されてその參謀長となつた。茲で縱横に腕を揮つたが、昭和九年三月、第五師團長に榮轉して、西尾壽造中將と交代し、それから朝鮮軍司令官となつて今日に至つてゐる。此の轉任の時は中央部に來ると云ふ話もあつたが、柳川中將や建川中將との釣合上から、とうとう朝鮮にやられたのである。

× × × ×

彼の滿洲經綸は、若い時からの宿望であつた。少佐時代から永く支那問領を研究してゐたが、その研究がやがて事實の上に役立つた。大正十四年に郭松齡が張作霖に叛旗を翻したとき、參謀

× × × ×

柳川中將は荒木貞夫と親交があるらしい。先般、長女和子さん(二五歳)が結婚するときは、荒木が媒介者となつてゐた。先輩福田さんの墓參を缺かしたことのないのは、柳川さんの禮を知る人と爲りを知るに充分である。

柳川さんは幾度も中央部に來るだらうと言ふ話はあるが、唯話に止つてゐるのみである。彼が臺灣軍司令官となる前は、第一師團長より參謀次長になることは餘程決定的であつたやうだが、遂に臺灣にゆかれた。

× × × ×

然し、今日の軍部の流れに一番良く、乘り得る人物としては、先づ柳川中將を筆頭に上ぐべきであらう。他に適任者がないやうである。

柳川さんは、陸相としても、總監としても、總長としても、良くやつて行ける人物である。

殊に國體明徵の徹底を具體化せねばならぬ今日、柳川中將を中央に迎へることは皇軍の一大早急事である。何となれば、柳川中將ば、天皇機關說排擊の聲をあげた最初の人であり、國體の開顯を强く主張する人だからである。此の點に就いては部內齊しく之を認めてゐる。石井大佐の如

の自作だと言ふことである。中々隅にはおけない。

どんと〳〵〳〵大砲小づゝ
　やみに響けば妖雲晴るゝ
さつと浮き出た奉天城の
　城のかなたに旭は躍る

小唄でも作るとなると、又小磯んさに對する認識も、多少變るかも知れぬ。彼としては、もつともつと頭を廣くして、社會を知らねばなるまい。そうすることに依つて、彼の大臣學が大成するであらう。切に建闘を祈る。

5、臺灣軍司令官　柳川平助中將

柳川平助中將は明治十二年、長崎縣西彼杵郡村松村に生れた。本年五十八歳の働き盛りだ。陸軍士官學校騎兵科の出身しにて陸軍大學を出てゐる。

長崎縣からは陸軍大將として先きに樞密顧問官福田雅太郎大將を出してゐる。柳川さんが大將になれば二番目である。而かも彼はやがて大將になるであらう。もういゝしめたものだ。

多田少將は、なか〳〵進歩的な考を持つてゐる軍人である。そのことが、多田少將の戰術から見てよくわかる。

即ち、土肥原賢二中將あたりは「支那人は酒でも飲ませれば、それでよい」などと考へて、軍閥を相當に重視してゐると云ふ工合で、まだいくらか「上から」行くと言ふ舊式の戰術であるやうに見えるが、多田少將はさうではない。「下から」の戰術を重視してゐる。即ち北支那の獨立運動に就いても、多田少將は宋哲元などよりも、むしろ、民衆の自治運動を重要として、その成行きを凝視してゐた。そしてその方面に彼の力を注入した。

さやうに、多田少將は民衆の力と言ふものをよく知り、民衆運動の重要性を充分に認識してゐるところの、進歩的な軍人である、と言はれてゐる。

× × × ×

多田少將は、明治十五年宮城縣に生れた。本年五十五歲の男盛りである。陸軍大學出身の春秋に富む人物である。

きも亦然りである。」

× × × ×

柳川中將は部下其他一般の後輩に對しては、極めて親切であり、且禮儀をよく守る人である。公務多忙の內にも決して後輩の世話を忘れない。と共に、又他人に對して言葉使ひからして軍人に似合はず、丁寧である。此の點に柳川さんの性格が見える。

× × × ×

然し、騎兵科出身だけに、騎兵式の所がある。敏感、機敏は長所である。が然し、聊か短兵急なところがあり、圭角があるやうにさへ見える。この點は柳川さんが部內の囑望を負つてゐる人だけに、大いに自重して大成してもらひたいものである。」

× × × ×

柳川さん！　盲蛇的忠言かも知れませぬ！　其點は惡しからずお許し下さい。唯閣下の自重、健鬪を切に祈る。

6、支那駐屯軍司令官　多田駿少將

普及社刊行　社會常識書目

定價十錢
送料二錢

- 三井善太郎著　夫婦和合家運繁榮の秘訣二百十條
- 立春大吉著　人情訓處世訓・川柳道話
- 新井亘著　名流婦人百態
- 黒白社同人編　妻と夫との抗議と反駁（漫畫）
- 漫畫クラブ編　絕對成功虎の卷（漫畫）
- 三井善太郎著　人に好かれるにはこれだけは心得おくべし
- 城西隱士著　日常に必要な法律知識　これだけは心得おくべし
- 三井善太郎著　挨拶の仕方と話の種　これだけは心得おくべし
- 輪井英武著　人を使ふには使はれるには　これだけは心得おくべし
- 柴野道夫著　手紙を書く要領と秘訣　これだけは心得おくべし
- 上條海二郎著　醫者の來るまでの手當法　これだけは心得おくべし
- 三井善太郎著　男女禮法と社交術　これだけは心得おくべし
- 中村文聽著　人生と人相秘訣　これだけは心得おくべし
- 新渡戸稻造著　讀書と人生その趣味と利益（特價廿錢）
- 三井善太郎著　日々の論語
- 和田白雲著　全國汽車電車安乘及び旅行必要の知識
- 須田狂介著　會議座談會及び演說會の仕方
- 千田理示造著　新東株變動必勝原理
- 大森義太郎著　いかに買ふべきか　いかに買はすべきか
- 小豆山人篇　江戸小咄傑作集
- 三井善太郎著　働くには働かせるには　これだけは心得おくべし
- 尾崎行雄述　西園寺公と犬養毅を語る

附、相澤中佐事件公判の更新

相澤中佐の軍法會議公判は、二月二十七日午前十時より、青山第一師團軍法會議法廷に於いて開廷する豫定なりしも、二、二六事變のために無期延期となり、法定期間たる十五日をも經過したので、軍法會議法第三九七條に依り公判は新規蒔直しとなつた。

裁判長たる歩兵第一旅團長佐藤正三郎少將は、三月二十三日を以つて待命となり、從つて右軍法會議の裁判長も免ぜられるに至つたので、その後任には騎兵第二旅團長內藤正一少將が任命されることになつた。

內藤少將は、明治二十年五月愛知縣に生れ、本年五十歲、陸軍士官學校第十八期の騎兵科出身にして、明治三十九年六月騎兵少尉に任官、第二十師團司令部付より、騎兵監部付を經て昭和十年八月少將となりしものにして、陸軍大學出の俊才である。

判士としては、前の判士が皆、今回の二月事變に依つて引責待命となつたため、その代りに、第一師團司令部附（東京工業大學服務）の步兵大佐畠山政之丞氏及び輜重兵第一大隊長の輜重兵大佐立石益太氏が任命された。

——完——

愛讀者へ急告！

■三井善太郎氏の二名著「人に好かれるにはこれだけは心得おくべし」「挨拶の仕方と話の種」は大好評で、賣行殺到し再版又再版の盛況を呈して居ります。賣切れぬ中に御求め下さい。
■尙此の外に賀川徹哉氏飜譯の「日本はどうなるか」を只今發賣中です。これは外國のスパイが日本の內情を曝露せるもので、興味溢れる讀物です。
■本社は愛讀者各位の御厚情と全社員の奉仕的努力によつて今や完全に册子界の最高峰を濶歩して居ります。各位の一層の御愛讀を御願ひ致します。
■愛讀者各位に新刊の御通知、連絡を圖るため愛讀者カードを作製致して居りますから御手數でも本書御買求めの方は是非左記事項をハガキで御知らせ下さい。

一、お求め書の題名　一、お求の場所
一、讀後感　一、御住所御氏名
一、いかなる種類の書物の出版を御希望か

（非常時！陸軍を擔ふ人々）　定價拾錢　送料二錢

昭和十一年四月二十日印刷製本
昭和十一年四月廿五日發行

著者　本城廣信
東京市神田區須田町一ノ二四

發行人　村上第作
東京市麴町區飯田町一ノ二四

印刷所　新興社印刷所
東京市麴町區飯田町一ノ二四

印刷人　卜部常次郎
東京市神田區須田町一ノ二四

發行所　普及社小册子書林

東京市神田區須田町一ノ二四
發賣所　普及社
振替東京六五七五〇番
電話神田(25)三二二三番

普及社刊行　時事問題書目

定價十錢　送料二錢

- 梅崎中佐著　十對六の比率ではどうして戰爭が出來ぬか
- 高律正道著　警官を批評す
- 並木清哉著　宗教復興時代の日本
- 並木清哉著　赤軍とスターリンの兵術
- 松下芳男著　歐洲大戰再勃發か？
- 松下芳男著　永田鐵山論
- 松下芳男著　明日の軍部を擔ふ人々
- 大山卯次郎　角岡知良　松下芳男著　イタリー立ちエチオピア應ず　東阿の戰雲世界を掩ふ
- 松下芳男著　林陸相より川島陸相へ
- 安田龍太郎著　風雲日本の景氣
- 松下芳男著　陸軍大演習を軍司令官より見る
- 小林友治著　明日の政權を擔ふ人々・維新の群雄七人男
- 小林友治著　歐米の機密室は躍る
- 裕田明道著　北支獨立運動實相と日本の立場
- 摩山寛二著　大本敎の正體と檢擧の眞相
- エムラシャーン著　賀川徹哉譯　日本はどうなるか？　スパイの見た日本の內情
- 本城廣信著　非常時！陸軍を擔ふ人々